

かわすじ 今曰談

噴き出す汗をぬぐい、大がまをグイッと引く。胸のあたりまで生い茂ったススキやカヤが倒れ、伸び盛りの若木が姿を現す。作業が進むにつれ、幾筋もの涼風が森を渡っていった。

遠賀川の源流にあたる嘉麻市の馬見山(うまみ)一帯には一九九七年から苗木が植えられた。クヌギ、ヤマザクラ、ケヤキなど約一万本。スギ、ヒノキなど人工林中心の森に落葉樹を植栽、森の保水力を高め、ふるさとの川の命脈を守ろうとする取り組みだ。その下草刈りが先日あり、今年も流域のボランティア

約二百人が作業にあたった。もう十年ほど続いている。

私がこうした水源の森再生プロジェクトに参加するようになったのは、日田支局(大分県)に勤務していた当時、福岡県大野城市の上野誠さん(六六)、朋子さん(六四)夫

を植えた。晴れた日には阿蘇の連峰を一望できる。

「どんな森によみがえっただろう。数年後、夫婦はドライブがてら現地を訪れたが、目の当たりにしたのは無残な荒地だった。心を痛めた夫婦は九九年秋から毎

イアに参加する。ところが、その後の維持管理は大半が地元任せ。過疎・高齢化、自治体の財政事情もあり、植林地は荒廃する傾向にある。あとき、何万本の苗木が植えられただろう。その苗木がど

うなったか、見守り続けている人間ほど作業を続け、地元の計らいで無料入浴できる温泉に身を浸す。ただそれだけなのに、不思議な心地良さ、充足感に包まれる。森の磁力にさまざまな人が吸い寄せられ、家族のようなコミュニティ(共同体)を形成していた。

あの苗木を忘れぬ心根

婦の取り組みを知ってからだ。

林業のまち・日田市一帯では一九九一年、台風による風倒木被害が広がった。こちらは筑後川の源流。下流の福岡都市圏の住民らも巻き込み、植林ボランティアが活発化。上野さん夫婦も九四年、同市天瀬町の山頂にヤマザクラなど

月第四土曜日に下草刈りを始めた。最初は二人きりだったが、徐々に支援の輪が広がり、今ではちよつとした山頂公園に生まれ変わるうとしていた。

渇水、水害、台風の直後、多くの人々が一滴が誕生する源流の未来に思いをはせ、植林ボランテ

が何人いるだろう。夫婦の取り組みは、ボランティアの原点を私たちに訴えているように思えた。夫婦は空き家になった古民家を借り受け、活動拠点にしていた。そこに午前十時ごろ、みんなが集まり、同十一時ごろから作業を始める。弁当を広げた後、再び二時

間ほど作業を続け、地元の計らいで無料入浴できる温泉に身を浸す。ただそれだけなのに、不思議な心地良さ、充足感に包まれる。森の磁力にさまざまな人が吸い寄せられ、家族のようなコミュニティ(共同体)を形成していた。

地球環境、国際交流への関心が高まる中、植林ボランティアは国境の垣根を越えて広がつつある。本社などが企画した砂漠緑化ツアーもその一つ。中国、内モンゴル自治区の砂漠にボブラなどの苗木約五百本を植える予定。七日から五泊六日のツアーには筑豊からも高校生三人が参加する。

楽しみながら続ける、そして忘れない。そんなボランティアの心根も育てたい。

(筑豊総局長・佐藤倫之)